



2022年1月号(No.10)  
 公益社団法人 日本山岳会  
 The Japanese Alpine Club  
 東京都千代田区四番町5-4  
<https://www.jac1.or.jp>  
 編集担当: 新井 梓

3カ月に一度発行する「山」YOUTH版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部のYOUTH CLUBの取組みなどをご紹介します。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

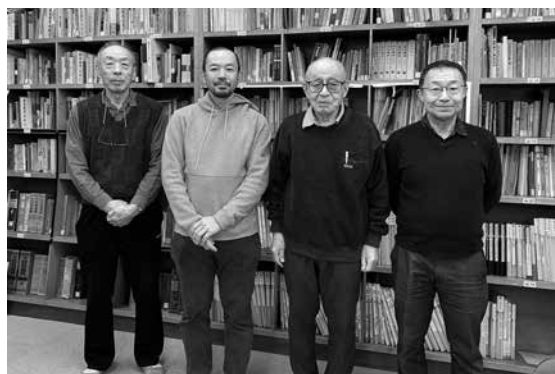
## 越後支部との交流【1】

# 越後支部創設者・藤島玄氏の「藤島蔵書」を拝見

2021年11月、中谷康司青年部部長が、新潟県岩船郡関川村にある「藤島蔵書」を拝見。本会2番目の支部として越後支部を創設し、初代支部長を務めた藤島玄(本名:源太郎)氏の蔵書で、関川村と協定を結んだ越後支部が管理をお手伝いしている。訪問に際しては、平田大六氏(元越後支部長)を代表とする藤島蔵書研究会のメンバーの方々から解説をいただいた。その様子をレポートする。

訪問のきっかけは、同年10月初めに歩いた胎内尾根(飯豊連峰門内岳)の山行に始まる。かつて国体のために登山道が伐開されたこの尾根は既に廃道となつて久しく、激しい藪漕ぎに終始する山行となつた。強烈な印象を残したこの山行を終えてみると、この尾根の盛衰や山行前に読んだ越後支部のKT(多田和広)さんの踏破記録への興味が止まらない。そこで越後支部へメールを送った次第である。すぐに、佐久間雅義さんから当時の資料が届き、また飯豊・胎内の会の亀山東剛さんをご紹介いただいた。そして、その過程で飯豊のあらゆる資料が揃っている藤島蔵書の存在を知つたのである。山行以来飯豊のことばかりを調べていた私は直ぐに訪問を志願した。

佐久間さんと待ち合わせ、まずは平田さんにご挨拶に伺う。蔵書は平田邸前の関川村立川北小学校(閉校)の一室に作られていた。教室後部の壁一面に山岳関連の図書が並び、その他の書架には民俗学など幅広い関連書籍やアルバムが収められている。その数は6,000点に及び、新たな寄贈書も加え、増え続けている。さらに、窓際の明るい空間に閲覧・研究の広いスペースもあるのだから、山屋には垂涎の空間だ。全ての資料は分類別に整理され、目録もある。書籍だけでなく、藤島氏直筆の「登山ノート」等もあり、デジタル化の上、原本とは別に複製があつて閲覧も可能だ。また、氏の著した記事も1つのファイルにまとめられ、ここに来れば、氏の動静足跡が即座に分かる仕組みだ。単なる整理・分類の域を超



左から田邊、著者、平田、佐久間(敬称略)

え、研究レベルの仕事だと驚いた。これは田邊信行さんの仕事である。その他、藤島氏の仕事の1つである大地図は、版ごとにラミネート加工され、この山域の時代変化を直ぐに比較できる。また、当時の山道具などの資料展示も豊富であつた。

施設や資料も素晴らしいが、資料の限ない把握に驚かされた。皆さん、質問には即答である。胎内尾根の資料は瞬く間に集まったが、資料だけでは見えてこない人の繋がりや経緯までを知ることが出来たのは非常に大きかつた。それにしても皆さんの飯豊愛、藤島愛が凄い。いかに「玄さん」「藤島先生」が魅力的で、この界限の人々に影響を与えたのかが偲ばれる。今回、支部の方々と触れることによって、山域の魅力が何倍にも広がった。日本山岳会は全国に支部があることが大きな特徴である。出来たつなかりを深めつつ、さらに色々な支部の方々と接する機会を持てればと思つた蔵書訪問であつた。

※なお、2日目には石山政雄さん、本部から松尾みどりさんが参加した。(青年部・中谷康司)

越後支部との交流 [2]

# ブナの美しい菅名岳、信仰の山・弥彦山へ

2021年11月20～21日、越後支部ユースと本部ユースの交流登山を実施。郷土の山として愛される菅名岳と弥彦山への登山を楽しんだ。

ワンダーフォーゲル部の月例山行として新潟県の菅名岳、弥彦山へ行く企画があり、折角新潟へ行くので是非一緒にしたいと越後支部ユースへお声かけしたところ、ユース委員長の玉木大二朗さん、知野勇人さん2名がご参加くださり、本部ユースから4名、総勢6名での実施となった。

11月20日は菅名岳、小山田登山口から丸山尾根で菅名岳頂上、下山は五葉コースの周回ルートをとった。磐越西線馬下駅に集合し、小山田登山口へ向かう。小山田登山口から山頂までの丸山尾根はブナ林の広がるコース。900m以下の山にあるブナ林が珍しいということや、ブナの根の張りかた、ブナの実の食べ方など、玉木さんからブナ講座を受ける。程なくして頂上に到着。頂上からは飯豊の山並みが一望、頂上ではきのこ汁とかきのもとのおひたしをご馳走になる。おいしさに感激！きのこは飯豊の麓で採ってこられたのだそうだ。越後の山の幸に舌鼓を打つ。下山後は新潟駅前で懇親会を行った。

翌21日は弥彦山へ。弥彦山は当会では高頭仁兵衛翁寿像の置かれている山として知られており、メンバーから新潟で登ってみたい山としてリクエストがあり実施した。ちょうど弥彦神社で菊まつりを開催しており、登山前に様々な菊を鑑賞。その後、弥彦神社にお参りし、登山開始。山頂に立ち寄った後、高頭仁兵衛翁寿像の前で記念撮影。越後平野が一望できる特等席に置かれている。



高頭仁兵衛翁のレリーフの前で。左から、越後支部の知野勇人さん、玉木大二朗さん、筆者、右の3人は本部ユースメンバー

山行中は玉木さん、知野さんから高頭際の様子をお聞きする。来た道を下り、弥彦神社へ下山。家族連れも多く、県民に愛される山であると感じた。

下山後は地元の屋台名物・ポツポ焼き、5つの味が魅力的な新潟ラーメン、新潟清酒、B級グルメ“イタリアン”と越後のグルメで締める。

最後になるが、参加してくださった玉木さん、知野さんに心より感謝したい。玉木さん、知野さんのおかげで何十倍も思い出深い山行となり、参加メンバーを代表してお礼を申し述べたい。

(ワンダーフォーゲル部・廣岡正敏)



## 前っちの山と酒

山を用いた季語に「山笑う」、「山滴る」、「山装う」、「山眠る」がある。山にまつわる語句はなんと風流、季語により導かれる山の情景が厳しくもどこか雅さを纏わせていると感じる。

この季語を知ったきっかけは、鳥取県鳥取市にある山根酒造場が造る季節酒「山眠る」に出している。この蔵酒は完全発酵を大切にしており、余分な甘みを極力おさえた造りをしている。糖分量を減らして、糖分量を減らして酒にする。最近では甘みと酸味が完成するまで、完全発酵の酒を造る。完全発酵の酒は甘みを抑えているため、食とあわせることで、酒食双方が引き立てられるのだ。



季節酒は数あれど、旬の食とあわせ季節を一層感じられる酒、食とあわせることで喜びが増す酒。さらに冠された季語から“旬な山”に想いを馳せることのできる酒である。山にこの酒を持ち込みより一層、山の季節を感じたいものだ。冬の季節？ペミカンとあわせるなら熱めの燗酒がいいだろう。火入れた日置桜はぬるめでも熱めでも美味しいが、個人的には熱々の70度前後まで上げると更に美味しい。燗冷ましでも美味しいので、冷えやすい山の夜にもぴったりだ。

(青年部・前川晋也)

「日置桜 山装ふ」鳥取県鳥取市、山根酒造場

## ■ 学生部活動レポート【1】

## コロナ禍を乗り越え、マラソングライミング大会開催

学生部が毎年開催している主なイベントとしてマラソングライミング大会がある。昨年度は新型コロナウイルスの影響で開催できず、今年度はこれまでの会場が使えない中、2021年11月13日に両大会の規模を縮小して、開催に漕ぎ着け、協賛企業や地元自治体の協力も得た大会とすることができた。

部活動で目標や計画を作るときに心掛けているのは「いつ、どこで」だ。例えば、冬の劔岳早月尾根に登るといった目標のように具体的に「いつ、どこで」が早々に決まれば、モチベーションも上がるし、その目標を達成する過程も自ずと決まってくる。しかしながら、今回、「いつ」は11月で決まったものの、「どこで」は例年使っているマラソン、クライミングの場所は新型コロナウイルスの影響で使えなかった。

「どこ」が決まらない時、夕方のニュースが頭に浮かんだ。内容は松田町が約4000万円を投じてクライミング用の人工壁を作ったものの3年間で2件の利用しかないということが問題視されていた。「これだ!」と思い、すぐ松田町役場に電話を掛け、直接交渉できる機会を設けていただいた。課長さんと交渉し1日1人1000円というリーズナブルな価格で話が纏まった。その後もマラソン大会に適した場所をご紹介いただいたりと、至れり尽くせりだった。お陰で両大会の「どこで」が無事決まった。

協賛やマラソン大会の開催にあたっての開成町、警察との交渉など、準備話は尽きないが割愛する。



準備から当日運営まで、交流を楽しんだ学生たち

当日は松田町の教育長、町長さんまでも視察に来られ、地元のPRにも一役買うことができ、良い大会になった。

クライミング大会は37名の参加者がレベル別で3クラスに分かれて競技を行った。ビギナーはトップロープで10a～b、ミドルはリードで10c～10d、アッパーはリードで12b～c。アッパーはルートセットを初めて担当する学生が思いがけずルート設定を難しくしてしまったため、完登者は現れなかった。全体として例年(2、3年前の大会)に比べ、ビギナークラスでも全く登れないという人は見受けられなかった。いまやコロナ禍で、山に行けない中のクライミングジム通いが一般的になっている。それが少なからず大学山岳部のクライミングレベルにも影響しているように感じた。

マラソン大会はクライミング大会の場所から徒歩15分ほど歩いた富士山が正面に見える河川敷で行った。今年は、規模は縮小して1人4.5kmを4人で走る大学対抗の団体戦のみとなった。

全ての行事が無事、時間通りに終わり解散となった。解散したあと、違う大学の参加者同士で「今度、一緒にクライミングに行かない?」と誘い合う声が聞こえた。新型コロナウイルスで滞った大学交流に大きな一歩を踏み出した1日になったように思う。

(学生部・斉藤孝太郎〔東京農業大〕)

## 《大会結果》

クライミング大会

ビギナー：1位 中沢(立大)、2位 井之上(青学)、  
3位 鎌形(早大)

ミドル：1位 新垣(東大)、2位 佐々木(専大)、  
3位 土田(東大)

アッパー：1位 藤田(学習院)、2位 福田(東大)、  
3位 坂入(農大)

マラソン大会

総合：1位 東京農業大学、2位 早稲田大学、  
3位 立教大学

男女混合：1位 東京農業大学

## ■ 学生部活動レポート [2]

## 雪山への手応え 初冬の谷川岳で雪上訓練

新型コロナウイルスの影響が続くなか、雪のシーズンが始まった。感染者数が減少したタイミングで、学生部では加盟している大学及びクラブを対象とした、雪上訓練山行を実施。初めての試みだったが、今後の学生部発展に繋がるような手応えを感じることができた。

今年の4月、現在学生部委員長を務める斉藤さん(東農大4年)ら学生数名と今年の運営についてミーティングを実施し、年度の活動計画について話し合った。

その中で、コロナ禍で満足に活動を行うことができないクラブが増え、新人教育にその影響が顕著に表れてしまっているという話になった。ここ数年、学生部では2月にアイスクライミング講習登山を実施していたのだが、今年は初級者向けの講習登山も実施ができればよいな、と頭に浮かんだのが開催の発端であった。

大学山岳部というものは、どんなに完成されたチームを確立できたとしても、4年間でメンバーが全て入れ替わってしまう。また、人の出入りも激しい。だから、登山において重要な思考や技術、ノウハウをまんべんなく継承することが難しいのだ。そこで、既に技術などを身に付けている上級生においても、雪山シーズンの初めに、今一度技術等の再確認をして、安全に雪山へ向かう姿勢を整えたいと、講師陣が雪上訓練プランを構築した。

山行当日の2日間は特に大きな問題も無く、計画通り(少なくとも私のイメージ通り)に進めることができた。講習内容は、天候不良によって変更があったが、状況に応じた計画の変更も、登山では必要な能力だ。変更理由も参加者と話し合うことで、経験の少ない学生にとっては学習の重要なポイントとなる。臨機応変な講師陣の対応を見られたことで、参加者も実践をイメージしやすくなったと思う。

参加者の中には積もった雪を初めて踏むという参加者もあり、雪に包まれた山々を見られただけでも歓声をあげていた。不慣れながら講師の説明を熱心に聞き、不明点があればその都度、積極的



雪山登山のノウハウを着実に学んだ

に質問していた。

山行後日、参加者に向けたアンケートを実施した。参加者の学生たちは、講師陣の感じていた感触と同程度の充実感を持ってきていたようで安心した。

今後も、「学生部にしかできないこと、学生や加盟クラブに必要とされること」を意識し、学生部をサポートしてくださる委員の皆様と運営していきたいと考えている。

(学生部 宮津洸太郎)

## 《学生部 雪上訓練山行》

日程：12月4～5日

場所：谷川岳周辺

講師(山行CL)：宮津洸太郎(学生部部长)

講師補佐(山行SL)：村上正幸、杉原一樹(いずれもユース委員)

参加者：5校13名

講習内容：

(1日目) 冬山装備の確認、雪上キックステップとピッケルとのコンビネーション講習と訓練、雪上でのテント設営と食当指導

(2日目) テント撤収指導、パッキング講習と訓練、冬のウェアリング講習、雪上でのロープワーク講習と訓練、アバランチ捜索講習と訓練